

寝ずの番

2007(平成19)年6月10日鑑賞(国際シネマ)

★★★★★



監督=マキノ雅彦/原作=中島らも『寝ずの番』(講談社文庫、角川文庫)/出演=中井貴一/木村佳乃/長門裕之/富司純子/笹野高史/岸部一徳/木下ほうか/田中章/土屋久美子/真由子/堺正章/石田太郎/蛭子能収/高岡早紀/桂三枝/笑福亭鶴瓶/浅丘ルリ子/米倉涼子/中村勘三郎(日本ヘラルド映画配給/2006年日本映画/110分)

……そ〇と外(そと)は、一字違いで大違い……? そんなチョー面白い導入部から始まるマキノ雅彦監督第1作となる傑作を、遅ればせながら堪能することに……。師匠、一番弟子そして師匠の妻と続く三連チャンの通夜は、R-15指定にふさわしい隠語とエッチな話題そして春歌(?)に満ちながら、上品で粋な「これぞエンタメ!」という内容に! こんな映画大好き、そしてこんな映画最高! 松本人志監督の『大日本人』(07年)、北野武監督の『監督・ばんざい!』(07年)のくだらなさに疲れていた私には、絶妙のカンフル剤に……。さて、あなたは……?

今、2006年の名作を

今や年間約300本の映画を観ている私だが、公開されている映画の数はそれをはるかに上回るため、見逃している名作もたくさんあるはず。したがって、株主優待券や招待券を活用して、そんな見逃していた名作を日曜・祝日に観るのは最高の幸せ。

俳優津川雅彦が祖父マキノ省三、叔父マキノ雅弘の跡を継ぎ、マキノ雅彦を名乗って「三代目マキノ監督」として作った第1作がこの『寝ずの番』で、大評判を呼んだ作品。2006年元旦の読売新聞の特集等でも大きく報道された話題作だが、実はこの映画はR-15指定。さて、それは一体なぜ……?

上品と下品、粋と野暮を区別するのは……?

映画は楽しむもの。そして、楽しむためには、遊びの心をもっていることが不可欠

だが、遊びの達人は粋な遊びができるもの。そして、マキノ映画の伝統は、「粋こそ最高」ということらしい……。

俳優長門裕之を兄にもち、女優朝丘雪路を妻にもつ俳優津川雅彦の活躍ぶりについては新聞紙上で詳しいからここでは述べないが、そんな芸能一家のサラブレッドは、当然粋な遊びも上手。

パンフレットにある監督インタビュー「芸・『寝ずの番』」によると、「まんこ」「ちんぽ」という言葉が乱れ飛ぶ作品への出演交渉で、「いったいどういう映画にするんですか」と心配する堺正章を口説いたのは、次のような言葉だったらしい。すなわち「下品はやらない。現場で下品の直前で止めるから大丈夫」というもの。また、「だけど、下品と上品の線を引くのは僕のセンス。だからこうも言った。『マチャアキとはガキのころから遊んでいるよなあ。でも、僕が今まで下品に遊んだことある？ ないと思ったら信じて出演してよ』ってね」とのこと。

現在のような画一的で融通のきかない映倫審査では、この映画がR-15指定となるのはやむをえないが、ホントは中学生くらいからこんな粋な遊びのセンスを磨いてほしいと、私は思っているのだが……。

一字違いで大違い……

この映画がR-15指定になったのも、また秘かに大評判を呼んだ(?)のも、この映画の導入部で展開されるそれまで観たことのないようなアツと驚く面白いストーリー……？ 落語には必ずオチがつくものだが、映画の冒頭で何人もの芸達者な俳優たちによる、「一字違いで大違い」の爆笑劇は、当の本人たちは真剣そのものだから余計面白くオチがつくもの……。

映画の公開が終わり、パンフレットやネット上でも平気でその言葉が使われているから安心してここでも使えば、それは「そそ」と「そと」……。

今、臨終の床にある上方落語界の重鎮橋鶴師匠(長門裕之)が、一番弟子である橋次(笹野高史)の「師匠、何か心残りはありませんか？ 最後に、これはやっておきたかったということはありませんか？」との質問に対して答えたのは、「外(そと)が見たい」ということだった。

しかし、もぞもぞと動くその口から語られた言葉が不明瞭だったのが運の尽き……。

何と橋次はそれを「そそ」と聞きまちがえてしまったのだった。「そそ」とは女性

器のことを指す隠語で、京都弁ではこれをお上品に「おそそ」と称している……。

こんな導入部、観たことない！

そこからスクリーン上で展開されるのは、誰のおそ〇を師匠に見せるのか？ 誰がどんな風におそ〇を見せるのか？ をめぐる真剣そのもののドタバタ劇！ 看護婦さんのそれ……？ フーズク嬢のそれ……？ 商売女のそれ……？ いやいややはり奥さんのおそ〇……？ それは絶対ありえない(?)から、弟子たちの妻の誰のそれか……？

橋次をリーダーとした弟子たちの人選の結果、白羽の矢が立ったのは、2番弟子橋太(中井貴一)の妻茂子(木村佳乃)。

元々キップはいいが気に入くわなないことがあると口より先に手や足や物が飛んでくるというのが茂子の生まれつきの性分。橋太からそんなとんでもない話を聞いた途端、かっとな茂子の頭に血が上ったのは当然だったが、そこはさすが橋鶴の2番弟子の橋太。「お前みたいな美人のおそ〇やないと、あかんのや！」との口説き文句にコロッと参った茂子は「わかったわ。あたしかてこう見えて咄家の女房よ。師匠のご臨終に恥ずかしいもへたたもないわ。見せましょう、こんなおそ〇で良かったら……」とタンカを……。ここから先の、茂子に扮する木村佳乃の前代未聞の熱演を固唾を呑んで見守ろう。

ハイライトは、らくだのカンカン踊りと下ネタ歌合戦！

この映画は全体を通じてメチャ面白いが、そのハイライトシーンは2つある。その第1は棺桶からひっぱり出した橋鶴の遺体(?)を真ん中にして、一方に橋次と橋太、他方に橋弥(岸部一徳)と橋枝(木下ほうか)が肩を組んで展開されるらくだのカンカン踊り。当初は三味線に合わせて、弟子たちが橋鶴師匠の死体踊りを手伝うだけだったが、調子に乗ってきた(?)5人のオヤジたちによるカンカン踊りの面白さと不気味さはまさに天下一品！

他方、第2のハイライトは橋鶴の妻志津子(富司純子)の通夜の席に、元売れっ子芸妓だった志津子をめぐって橋鶴の恋敵だったという、もと鉄工所社長(堺正章)が登場した後に展開される下ネタ歌合戦！

志津子から教えてもらった歌を披露したいという求めに応じて三味線を出したとこ

ろ、この社長は三味線を弾きながら何ともいい声で（あのかくし芸の天才マチャアキがやるのだから当然……？）エッチなお座敷歌を……。これに挑発されたのが橋太。そこから始まる2人の歌合戦と多少ハンディキャップのある社長を応援する女たち……。さらにひと勝負がついた後の、今度は勝負を度外視した大合唱。こんな楽しいイベントを次々とやっていけば、普通は長くうっとうしいはずの通夜の晩における「寝ずの番」も楽しさいっぱい……。

2代目もくじけずに

マキノ家に生まれ育ったことによって2代目、3代目の苦しさを十分知っているマキノ雅彦監督は、橋鶴師匠の長男橋弥を、親の才能を受け継がなかったため大いにコンプレックスをもつキャラクターとして描き、また岸部一徳はそんな微妙に屈折した橋弥の役を見事に演じている。

普通出来の悪い息子がいれば、弟子たちは妙に気を遣ったりして微妙な関係になるものだが、橋鶴師匠の弟子たちは全然そうではなく、辛辣。

とりわけ言いにくいことをづけづけと言いつ茶髪は咄家橋枝と橋弥は犬猿の仲……。さらに、大きいやかんは沸騰するのが遅いが、沸騰すればすごい、という含蓄に満ちた「大きいやかんの物語」によって多少気をよくした橋弥に対して、「ガスをつけなければ……?」「やかんが破れていては……?」「やかんに水を入れなければ……?」と次々とケチをつける弟子たちも口が悪い……。しかし、それでもくじけずに、2代目は2代目として修行を積み生きていかなければ……。

違法スレスレ(?) 行為もお笑いに

橋鶴師匠の通夜やその一番弟子橋次の通夜の席で、出席者たちの口から語られる数々のエピソードは、そのそれぞれが抱腹絶倒モノだから、その面白さは是非スクリーン上で味わってもらいたいもの。1つ私が大いに感心したのは、違法スレスレ行為(?)のエピソードもお笑いにしてしまうテクニック。日本では、大麻やマリファナが禁止されていることは誰でも知っているが、お正月ともなるとハワイに滞在する芸能人たちは、それに対する抵抗感が少なく、安易に使用してしまう傾向にあるのは、今は亡き大御所、勝新太郎の例を見ても明らか……?

しかして、橋鶴師匠を筆頭にした弟子たちのハワイ旅行ともなれば、そういう遊び

にはまる危険が大きいことは当然……。師匠の「おい、誰かマリファナ買ってこい！」の声に、弟子たちはさまざまなルートを通じてその入手を図り、マリファナ・パーティーを開いたが……？

こんな違法ストレス行為（？）を堂々とスクリーン上で観せるのはかなりヤバイはずだが、そこを上品で粋なお笑いでオチをつけるのが一流の遊び人。さて、そこに見せるマキノ雅彦監督の手腕は……？

色っぽいシーンは、監督の大サービス……？

橋鶴も人騒がせな師匠なら、その一番弟子の橋次もえらく悪い運の下に生まれてきた男のよう……？ 天気運の悪い人は雨男・雨女として嫌われる（？）が、橋次は噺家としてのイベントのたびに火事になったり、人が死んだり、大惨事が起こったりと散々……。もっとも、それによって免疫ができた橋次は、歌舞楽曲が禁止された昭和天皇崩御の日も、何と自分の落語会を堂々と決行したというからすごいもの……。

そんなドン底（？）を何度も味わった経験をもつためか、橋次は妙に芸能人たちから好かれていたようで、そのお葬式には桂三枝、笑福亭鶴瓶ら落語家の他、浅丘ルリ子、米倉涼子、中村勘三郎などの人気俳優もズラリ。ところが、そんな面白いキャラ橋次の思い出話を語る通夜の席においては、その席に全然似つかわしくない、思わずゾクゾクとするほど色っぽくセクシーなバーの女（高岡早紀）が登場するからご注目！ 60歳をとうに過ぎていると思われる橋次にはなぜか妻がいないから、一夜限りのアバンチュールはもちろん自由。ある晩、橋太と2人で入ったバーで展開されるエピソードはメチャ面白いもので、これはきっとマキノ雅彦監督の大サービス。

それにしても、師匠が茂子のおそ〇を見た3分後に成仏したなら、その一番弟子橋次もド派手なアバンチュールの直後に△△で死亡するとは、さすが絆の強い師匠と弟子……？

4度目は、私が通夜の席に

この映画は、最高に面白い導入部の小ばなし（？）の後、次々と成仏していった①上方落語界の重鎮である師匠橋鶴、②その一番弟子の橋次、そして③師匠の妻志津子の通夜の席を描くもの。

そして、その通夜の席では、「これぞプロ！」という出演者達による涙あり笑いあ

りの思い出話が、エッチで艶っぽい歌あり踊りありの怒涛の山の中で、展開されていくというエンターテインメント巨編！

ちなみに、若いくせにやけに通夜の作法に詳しいのは、茶髪の嘶家の橋枝。それは彼が次々と両親を亡くし、兄弟を亡くしていったため、葬式と通夜を嫌というほど体験してきたためというから、これまた悲しいけれど面白いネタがしっかりと……？

昼間の2時45分から4時35分までこの映画によってそんな3度の通夜を経験した私だが、実は6月10日の夜は、30年来の友人のHさんのお通夜。私が弁護士登録3年目に、ある事件の依頼者として知り合った後、ホントに家族同様の付き合いをしてきた彼は、私より9歳年上の67歳で死んでしまった。不動産関係の仕事をしていたから仕事上の接触もあったが、仕事の相談を聞いたりその依頼を受けると大ゲンカすることもたびたび……。そんなこんな思い出がいっぱい詰まったHさんのお通夜に行く日に、こんな、お通夜三昧の名作(?)を観たのも、何かの縁。Hさんに合掌……。

こんな映画、最高！

アッと驚く導入部から、三連チャンのお通夜での楽しいバカ騒ぎを見ていると、アツという間に1時間50分が過ぎてしまうことまちがいなし。この映画の原作は、中島らもの『寝ずの番』とのことだが、いくら原作が良くても、いい映画とするためには脚本が大切なことは言うまでもないし、映画全体を方向づける監督の方針がしっかりしていなければダメ。その点、監督第1作ながらマキノ雅彦監督の立てた明確な方針は立派なもの。また、名作となるためには当然名優が必要だが、この映画は長門裕之、中井貴一、堺正章の他、山田洋次監督の『隠し剣 鬼の爪』(04年)や『武士の一分』(06年)とは全く異質の軽妙な演技をみせた笹野高史や、難しい二代目のキャラをしっかりと見せてくれた岸部一徳などの名脇役がズラリ。またベッドの上に入り込み、師匠の目の前で仁王立ちになってスカートをめくりあげる木村佳乃の演技をはじめ、ヘタするとポルノ映画になりかねない演技を、何とも上品で粋な笑いに包み込む俳優たちの名演技にビックリ！

監督第1作ながら、「さすがマキノ雅彦！」と感心するとともに、同じ監督第1作で話題を呼んでいる天才松本人志にも、『大日本人』のようなくだらない映画ではなく、こんな面白い映画をつくってもらいたいと思ったが……？

2007(平成19)年6月11日記